

特別賞 紀伊国屋書店賞

『帝都東京・隠された地下網の秘密』 秋庭俊著

(中央新書・文庫 新潮文庫；あ-54-1)

商学部 3 年 池本卓麻

地下鉄を降りてから、地上に出るまでの地下通路。駅によっては想像以上に長く、自分がどこを歩いているのか、ふと疑問を抱いたことはないだろうか。

本書は帝都東京、この下に張り巡らされている地下鉄や高速道路などの地下網の実態を、鋭い洞察力で暴いた一冊だ。本書は最初に、大手2社の発行する国会議事堂前の地図を挙げる。地下鉄2路線が交差するものと、交差せず遠くに離れている2つの地図。100メートルもの誤差のある地図はどちらかが誤りなのか。その謎を解くべく、国会議事堂や首相官邸から永田町全体、そして東京の地下全体へと話は広がっていく。

新橋駅を目前として地下鉄 2 路線が不自然な急カーブを描く点。都内に数多く点在する地下街や地下通路、資本も系列も異なるビルが、広大な地下駐車場を共有している点。よく考えれば、不自然でしかないが、戦前から都内の至るところに地下建設があり、戦後、地下処理のために、それらの施設をつなぎあわせて地下鉄や駐車場などを建設したとすると説明がつくと筆者は言う。

それだけにとどまらず、戦前の地下鉄は銀座線だけという常識を覆すような、別の地下鉄の存在も読み取れる。戦後 GHQ が接收した日比谷公園、国会議事堂、赤坂見附駅、神宮外苑、また GHQ の最大の部隊が駐留していたワシントンセンターが設置されていた明治神宮。残された資料を考証していくと、1本の線が出来上がり、別の地下鉄の存在を垣間見ることができるのだ。

「『君は知らないだけだよ』という台詞は、いまの私たち国民にそのままあてはまる言葉ではないだろうか。」

という言葉で本書の最後を締めくくり、私たちに地下網の存在に限らず、政府への疑念を投げかけている。

大事な情報は、すぐには明かされない。国防を脅かす国家機密に関わることならば、なおさらだ。東日本大震災による原発事故に対しての影響も未だ語られることはない。東京の地下網の謎と同様に、政府から情報が明かされる日が来るのか。日の差し込む地上を歩いているように思う私たちは、実は想像以上に、深い地下街を歩いているのかもしれない。